特集

さよなら江差線

上ノ国と鉄道のあゆみ

JR江差線と上ノ国

JR江差線は、今日まで本町と地域住民にとって、その生活と発展を根幹から支えた重要な交通機関でした。

JR江差線が開通した当時、現在のような道路はまだ整備されておらず、自家用車などでの移動はおろか、途中起伏の激しい江差－木古内間（42・1㎞）を結ぶ山道を、当時の人々は馬車や徒歩によって行き来していました。

その江差線も、利用客の減少などから、平成26年5月11日をもって廃線となります。

ここでは、本町とJR江差線の関わりについて特集します。

江差線が出来るまで

当時、木古内と湯ノ岱を結ぶ木古内山道が整備され、少しずつ湯ノ岱方面の開拓が進んでいましたが、馬車などが通行できるというだけで、稲穂峠を越えるには、現在とは比べものにならない大変な苦労があったと伝えられています。

この間、檜山地域では、江差まで鉄道を誘致する活動が行われ、湯ノ岱を経由する上ノ国回りか厚沢部回りかで、多くの議論があったといいます。

そして、長い準備期間が置かれ、既に函館～木古内間を運行していた上磯軽便線を延長する形で本町への鉄道敷設工事が決定し、昭和8年に鉄道建設の人々が湯ノ岱に入ると、翌年に建設列車が稲穂峠を越え、昭和10年12月、ついに本町初の鉄道駅「湯ノ岱駅」が開業しました。

この時期、湯ノ岱は人と物が集まる檜山地方の玄関口となり、江差から貨物を運ぶ幌馬橇（ほろばそり）やバスが往来し、大変賑わったと伝えられています。

鉄道敷設に沸く

江差線の開通により、これまでの往来の不便さが解消された湯ノ岱では、当時の小学校で盛大な祝賀会が開催され、地域の人々はまちが発展していくことを喜んだそうです。